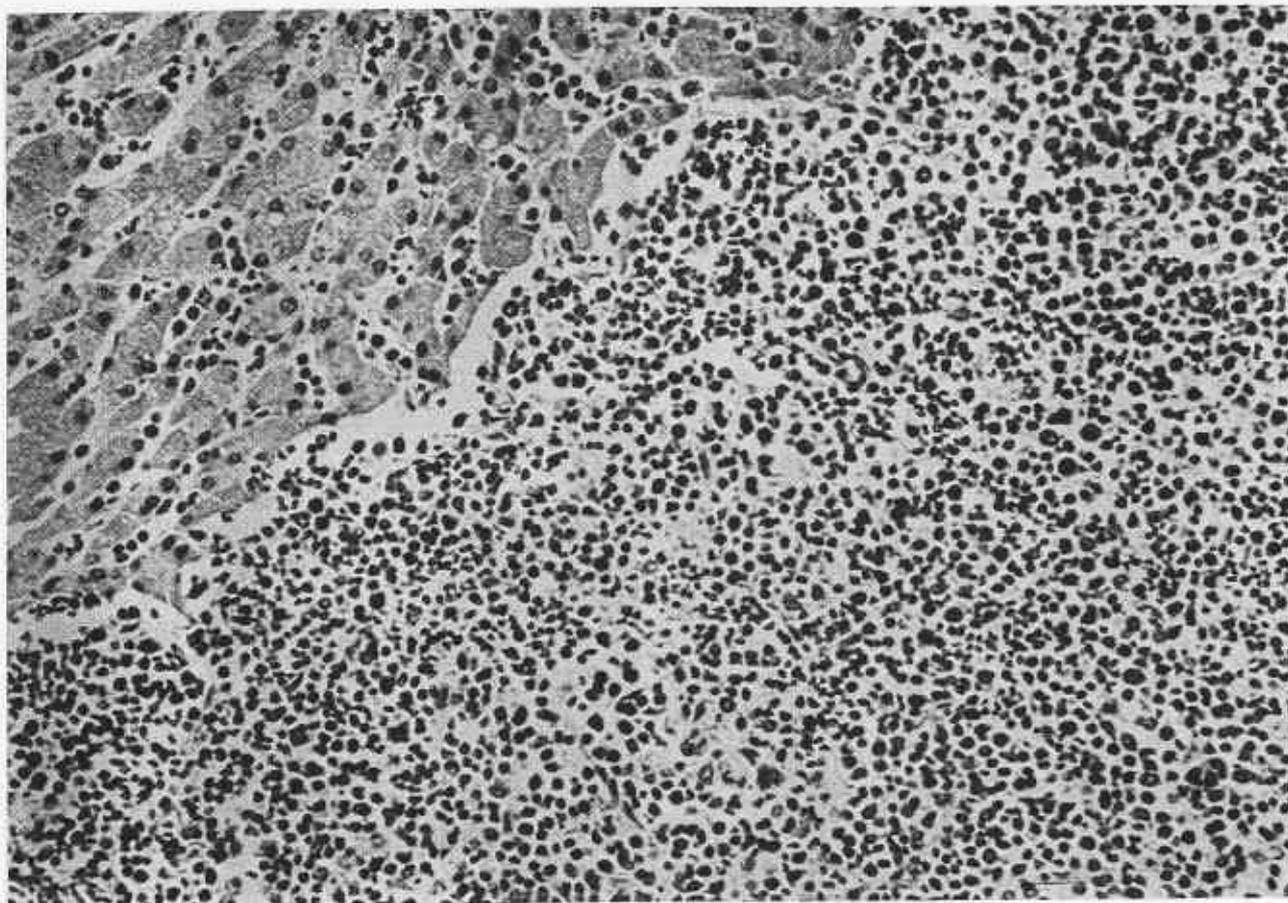


日 生 研 究

第 8 卷 昭和 37 年 12 月 第 12 号



豚のリンパ腫症の肝病変

家畜衛生試験場病理研究室および同中国支場出題・第 2 回獣医病理学研修会標本 No. 17

この写真は豚の肝臓である。生後 5 カ月。体重 75 kg. 突然の嘔吐、呼吸促迫、体温上昇 (40°C) で発病に気づいた。その後予後不良で約 20 日後に屠殺した。肉眼所見では、脾 (約 10 倍大)、肝 (4 倍大)、リンパ節 (手拳大) の腫大と肝の灰白色斑点が認められた。組織所見では、肝は、グ氏鞘および中心静脈周囲に細胞の繁殖巣を形成している。繁殖巣の拡りはグ鞘ではびまん性でかつ小葉内にも広く浸入している。中心静脈周囲では結節状を呈している。ジーマスオイドおよび脈管内にも流出している。繁殖細胞の種類は中型で胞体の狭い円形細胞が主体である。好銀線維はこの細胞群を小集団状に取り囲むような構造を示しており、細胞が個々に線維に固着している所見はない。この写真はグ氏鞘の細胞繁殖巣の一部の弱拡大である。参考までに他の臓器では、脾およびリンパ節は一樣に細胞の海と化し本来の構造は認め難い。細胞の種類は肝におけると同様である。

さて、このような病変を示す疾患の属する病理学的位置を、記載と命名をたよりに探ってみよう。人医学においてウィルヒョウ (1853) は白血病性変化のなかにリンパ性白血病の存在を認めた。チュルク (1903) はリンパ節が腫瘍的に腫大するものをリンパ腫症と呼んだ。シュリッデ (1909) はリンパ節の腫大が腫瘍的か否かに明確

な一線を画し難いという根拠でリンパ腺症の名称を用いた。獣医学の領域ではニューベルンおよびコールズ (1954) は白血病に包括し、リンパ腺症の命名を使用している。スミスおよびジョンズ (1961) は悪性リンパ腫の名称を用い、家畜腫瘍 8,159 例のうち 58 例の豚の悪性リンパ腫を表示している。日本では、中島・渡辺・渡辺・山本 (1954) は第 38 回の日本獣医学会で 4 例につき全身リンパ節の系統的腫大と肝、脾、腎の病変を記載し、白血病性リンパ腺症と呼んでいる (東京都と畜衛生検査業務研究報告集, 1962 には抄録のほか剖検所見の 2 表が記録されている)。

写真に示した標本、ひいては本例は、概略的には、豚のリンパ腫症、リンパ腺症、悪性リンパ腫のカテゴリーに属するものである。近似の病変と異同については、リンパ肉腫 (コンドラート) や骨髄腫症 (ヒルシュフェルド) などを念頭に浮べなければならぬだろう。これらは系統的な拡りの具合と細胞像などによつて区別される。

おわりに、豚のリンパ腫症と一概にいつても組織像は決して単一ではないのであるから 1 例づつでも積み重ねて本態を画き出す一助にしたい。これが筆者の念願でもある。(紺野 悟記)